

# 英文講読用教材を選ぶヒント

— 図書館員の観点から —

丸 本 郁 子

## I はじめに

本校における英文講読の目標及び指導方法についての私案は、すでに本校紀要9号の拙講に著してある。<sup>1)</sup> それに続くものとして、この文では、特に1年初期の教材を選ぶ際に考慮に入れたい点を、いくつか考えることにする。方法として、図書館員が本を選ぶ場合に用いる基準を、英語の教師が学生のために本を選ぶに当り、用いてみようと思う。

## II 英文講読の目標

学生要覧に示されている英文講読の目標は次の様なものである。

### 講読I (通年 週3時間 6単位)

英文に慣れることを目的とする。1. 日本語に訳さずに読む習慣をつける。2. 語彙を増す (5,000~7,000語程度)。3. 英々辞書を使えるようにする。4. 読書スピードを増す (200 w.p.m.)。5. 特に informational な文章を的確に読めるようにする。— 主題・要旨をつかむ。構成を理解する (outline, paragraph)。主要な論点と従属的なものの関係をつかむ (topic sentence)。意見と事実を読み分ける — 6. 朗読を通し、作品の理解と鑑賞を深める。

### 講読II (通年 週3回 6単位)

1年で学んだ技術をさらにみがく。読書スピードは250 w.p.m., 語彙数は10,000語をめざす。異なったタイプの文章にふれ、それらを的確に理解すると同時に、批

判的読みの力をつけ、自己の思想を深める。すぐれた内容や表現を持つ作品を味わうことにより、読書を楽しむ習慣を身につける。

And where do we start? Where the students are, there is no other place.

Raymond Reno<sup>2)</sup>

教師が教材を選ぶに当たり、上の言葉ほど適切なものは無いであろう。では本校の学生は、一体どのあたりに居るのだろうか。英語科専攻の学生として、文法・単語数などに関しては、ある程度の基礎はある。しかし、高等学校までの環境を考えると、彼女らにとって、英語はあくまで多くの教科の中の一科目であり、勉強の一対象に過ぎない。生きた言語として自分にせまってくるものではないし、又人に働きかけるものとなってもいけない。そのレベルから、英語を自分の主体に関わる言語として使えるようにすることが、本校の目標であろう。

この「学生の居る所」を読解力の観点から表現すれば、知的好奇心や理解力は大学生として高いにも関わらず、英文を読む力は低いということになる。講読の目標は、ここを出発点とし、英文を読むのと日本文を読むのがさして変わらないようになる所まで持っていくことだ。そこで本校の1年では、まず、英文に慣れることを目標とする。

### Ⅲ 易しい読物の必要性

慣れるとは、ある事態に面した時、心理的な圧迫や緊張を持たずに対処していけるようになることである。そのためには、自分がそのものを扱えると言う自信がなければならない。学生が英文を読む時、緊張することなく接するためには、読めるという実感を味わっていなければならない。英文に慣らすための教材は、まず彼女たちが易しいと感じ、抵抗なく読めるものを多く与える所から出発する必要がある。しかし、易しいといっても、質の低いものや、まったく子供向けのものであれば、大学生の教材には向かない。

#### IV High Interest, Low Reading Level Books

そこで参考になるのが、アメリカの図書館員たちが作る book list である。ある調査<sup>3)</sup>によると、1975年のデータであるが、アメリカ合衆国の大人の半数以上の読書力は、中学1年程度 (a seventh-grade level) であると言う。青少年の読書力を上げる取り組みは、国民的課題の一つなのだ。知的には大人だが、読書力の低い人達への読み物に関する研究が多くなされているし、図書館員たちも、High Low Books と呼ばれている book list を作っている。正確に書くと、High Interest, Low Reading Level Books である。このような本を選ぶ基準が、本校で教材を選ぶ時に良いヒントになると思うので紹介をしたい。

一つは、Florence Howe Munat が *School Library Journal* 誌上に発表した “A Checklist for High Low Books for Young Adults”<sup>4)</sup> である。この記事で Munat は彼女以前になされた slow readers に対する処方箋を総合し、図書館員が、知的興味は高いが読解力の低い読者に本を選ぶ場合、その選定の基準を数的に把握出来るようにと、一つのチェックリストを提案している。

#### V 選択の基準

このチェックリストは、全体が四つのパートに分けられ、第1部は体裁、第2部が読解レベル、第3部は文体と取り扱い、そして第4部が主題となっている。各部に採点基準が示され、その合計点を表1のランクにより判定する。作品の価値は、読者によって異なるものであるから、上の四項目の各部分が平均的に満たされたとしても、必ずしもそれが、ある読者にとって読み易い作品とは限らない。ある本の外観がいかにも貧弱であろうと、又難しい語が並んでいようとも、そのテーマに興味があるなら、読者は努力をして読みあげるということもある。その点は十分に理解しても、なお、この四つの項目は、それなりに検討に価する観点であると思う。

表1 HIGH INTEREST/LOW READING LEVEL CRITERIA

**Overall Rating**

- Score on Part I (Physical Characteristics)
- Score on Part II (Reading Level)
- Score on Part III (Style and Approach)
- Score on Part IV (Subject Matter)
- Total Score

The following table rates the book on how well it has satisfied high interest/low reading level criteria:

<i>Total Score</i>	<i>Rating</i>
60-55	Excellent
54-50	Very Good
49-45	Good
44-40	Fair
39-0	Poor*

*\*Not recommended for use as high/low*

表2 PART I PHYSICAL CHARACTERISTICS

**Part I**

**Physical Characteristics** (Check each that applies to the book)

- (1) paperback
- (1) attractive cover
- (1) appropriate size (preferably pocket-sized)
- (1) thin-looking (preferably under 125 pages)
- (1) short chapters with frequent breaks
- (1) good paper quality (nonglossy, opaque)
- (1) clear, black print
- (1) plain typestyle
- (1) 10 to 12 point type size
- (1) generous leading (space between lines)
- (1) generous margins
- (1) moderate line length (approx. 3¼")
- (1) plenty of illustrations or photographs
- (1) overall mature appearance
- Total

*(If total score is 10 or more, continue on to Part II; if less than 10, the book is disqualified as high/low.)*

## VI 外観・体裁

第1部の体裁は、表2に示されている各項目をどの程度満しているかで判定をする。各1点ずつを与え、合計が10点以上であれば合格である。

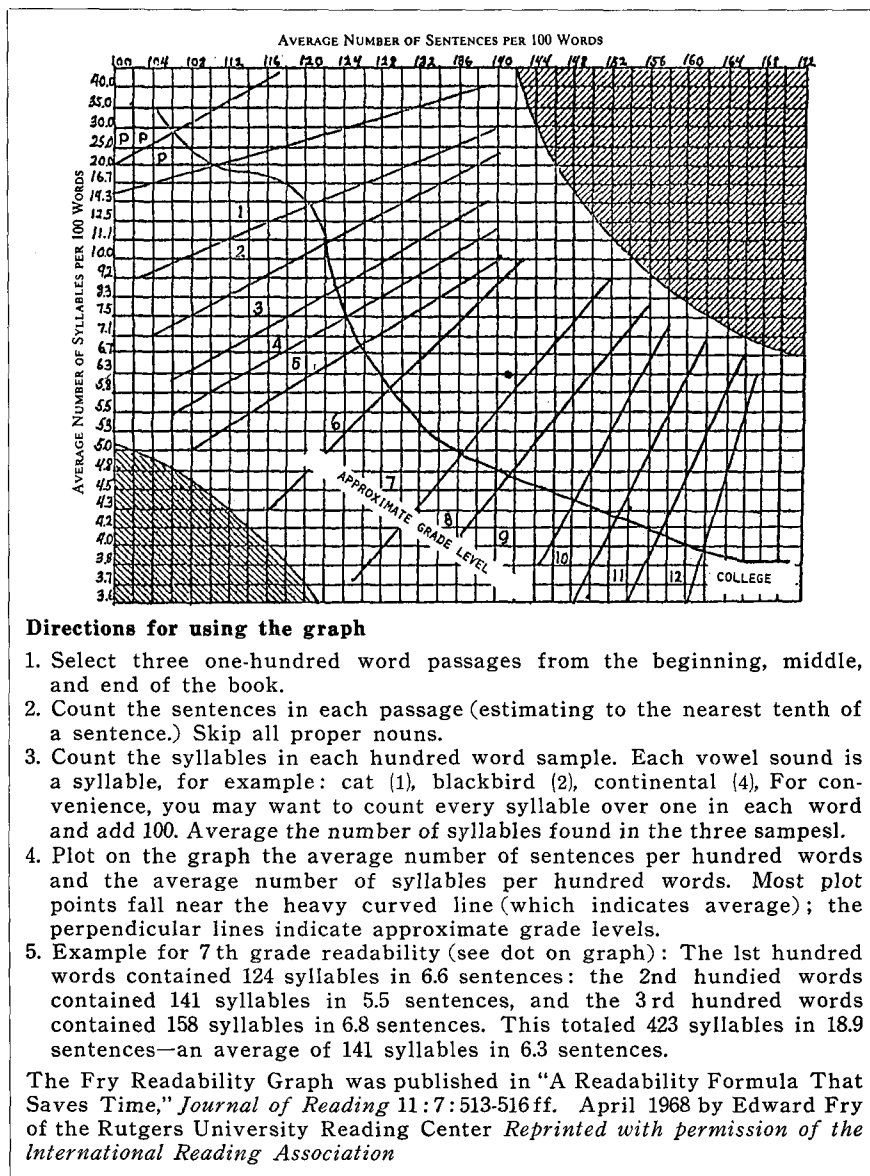
図書館員と教師との決定的相違点の一つは、**captive audience** を持っているかどうかである。図書館員は、読者が読みたくない作品を読ませる訳にはいかないが、教師は強制することが出来る。図書館員にとって、体裁はその本が読まれるかどうかのキポイントになるが、教師にとって、それは考慮外であったように思う。しかし最近まとめられた、大学教育学会（JACET）教材研究委員会による『大学一般教養課程における英語講読用教科書のあり方』を見ると、定価という制限つきではあるが、かなり体裁にも注意が払われるようになってきているようだ。<sup>5)</sup> 自発的に読む気を起こさせるためには、外的要素も大切だと思う。

現代の若者気質を考えても、重苦しく部厚いものは好まれず、**paper back** のような手軽さが喜ばれる。いくら読み易い印象を与えるものであっても、大人の読み物という雰囲気は欲しい。活字も読み易い大きさは必要だが、**babyish** ではないけない。行間のゆとりや一行の長さも考慮に入りたい。章や段落は短い方が望ましいが、論理的に区切られている必要がある。学生がそれらを読み進むに従って、次第にまとまりのある満足感に達せられるように並べられていなければならない。表紙・挿し絵・写真・図・紙質などにも注意を払いたい。

## VII 読解レベル

第2部は読解レベルをはかる。最近、日本でもアメリカでも、出版社は対象読者のレベルを表示することが多くなった。**Munat** は、**high low books** とは、それらの表示よりも3年又はそれ以上低いレベルにあると言っている。まず **Edward Fry** の考案した **readability formula**<sup>6)</sup> を利用し、対象とする本の **reading level** を決定し、それを出版社の示している学年レベルから差引く。その差が3年以上であれば **high low books** としては合格で10点を与えられる。日本人の英語科学生の読解レベルが、この **high low reader** と同様に、アメリカの一般読者との差が3年ほどであるかどうかは、別の調査

表3 GRAPH FOR ESTIMATING READABILITY



**Directions for using the graph**

1. Select three one-hundred word passages from the beginning, middle, and end of the book.
2. Count the sentences in each passage (estimating to the nearest tenth of a sentence.) Skip all proper nouns.
3. Count the syllables in each hundred word sample. Each vowel sound is a syllable, for example: cat (1), blackbird (2), continental (4). For convenience, you may want to count every syllable over one in each word and add 100. Average the number of syllables found in the three samples.
4. Plot on the graph the average number of sentences per hundred words and the average number of syllables per hundred words. Most plot points fall near the heavy curved line (which indicates average); the perpendicular lines indicate approximate grade levels.
5. Example for 7th grade readability (see dot on graph): The 1st hundred words contained 124 syllables in 6.6 sentences; the 2nd hundred words contained 141 syllables in 5.5 sentences, and the 3rd hundred words contained 158 syllables in 6.8 sentences. This totaled 423 syllables in 18.9 sentences—an average of 141 syllables in 6.3 sentences.

The Fry Readability Graph was published in "A Readability Formula That Saves Time," *Journal of Reading* 11:7:513-516 ff. April 1968 by Edward Fry of the Rutgers University Reading Center Reprinted with permission of the International Reading Association

## 英文講読用教材を選ぶヒント

を待たねばならない。

Fry の readability formula は表 3 のグラフを用い測定される。作品の最初・真中・最後の三個所から 100 語ずつの節をサンプルとして選ぶ。次に各サンプル中の文章の数を数え、三つの平均値を出す。同様に各サンプルの中のシラブル数を数え、三つの平均値を出す。グラフ上で縦方向に文章の数、横方向にシラブル数を取り、その接点の位置により、その作品のレベルを判定する。

上の Fry の測定値に加えて、Munat は用いられている語彙と文章も同様に点数化している。表 4 を参照すること。外国語・方言・スラング・複雑な比喩などが無いのか？文章は短い方が良い。複雑な文型や、極端に省略された文もふさわしくない。この 2 項目は 5 点ずつで判断をする。この様に、第 1 部と第 2 部は比較的客観的に算出するようになっている。

表 4 PART II READING LEVEL

<b>Part II</b>	
<b>Reading Level</b>	
For what grade(s) is the book intended?	A: —
Refer to the directions at the end of the checklist for applying the Fry readability formula. Find the reading level of the book; enter it on line B.	B: —
Subtract line B from line A. Enter the difference on line C.	C: —
<i>If the number on line C is three or more, check the lines below, and continue on to Parts III and IV. If the number on line C is less than three, the reading level of the book is too high to qualify it as high interest/low reading level.</i>	
— (10) reading level at least three years lower than grade level of intended readers	
— (2½) simple, understandable vocabulary (avoids foreign words, dialects, figures of speech, regional slang)	
— (2½) short, uncomplicated sentences (avoids complex constructions, inversions, elliptical expressions)	
— Total	

表5 PART III STYLE AND APPROACH

<p><b>Part III</b></p> <p><b>Style and Approach</b></p> <p>— (1) avoids difficult concepts</p> <p>— (1) avoids abstract language, allegories, symbols</p> <p>— (1) smooth, informal writing style</p> <p>— (1) avoids condescending or didactic tone</p> <p>— (1) quick beginning</p> <p>— (1) emphasis on dialogue and action; adequate description</p> <p>— (1) uses interest-creating devices (e.g., anecdote, humor, first-person narration, diary format, suspense)</p> <p>— (1) straightforward, chronological narrative (avoids flashbacks)</p> <p>— (1) limited number of settings that are familiar to reader</p> <p>— (1) characters with whom reader can identify</p> <p>— (1) limited number of characters</p> <p>— (1) problems or situations with which reader can identify</p> <p>— (1) consistent point of view</p> <p>— (1) limited time period</p> <p>— (1) fiction—exciting plot that builds logically to a climax; nonfiction—topic limited in scope</p> <p>— Total</p>
---

## VIII 文 体

文体と取り扱いの判定は、表5に示されている項目を主観的に判断して出す。複雑な概念は避ける。特に単純な言葉の裏に、難しい概念が隠されているもの(“To be or not to be” など)は、ふさわしくない。allegory や symbolism も難しさを増す要素だ。比喻や抽象的表現が頻出すると意欲を失わせる。なめらかで自然な文体や会話調のものが望ましい。説教調とならず、生き生きした文体が欲しい。特に書き出しは大切で、読者を話の筋に引き込む工夫が必要だ。物語なら、会話や動きのあるものが良い。逸話・ユーモア話・日記・新聞のスタイル・サスペンス・一人称の語りかけ等も、読者の興味を引く要素だ。構成は論理的な発展に従うものが良く、出来たら **chronological order** が望ましい。

状況・時代・場所もある程度限られたものの方が分かり易い。読者が作中の人物と共感出来る方が良く、登場人物の数もあまり多くない方が良く。また



めると、文体と取り扱いは *dramatic unities* (action, character, time, setting) に従うべきだということになる。

## IX 主 題

表6 PART IV SUBJECT MATTER

<b>Part IV</b>
<b>Subject Matter or Content</b>
— (5) interesting to readers
— (5) involves readers to complete book
— (5) will promote further reading
— Total

主題は、まずそれが読者にとって興味を引くものであるかを判断せねばならない。ここで大事なことは、たとえ *poor reader* であっても、主題への興味に関して言えば、*good reader* と変りが無いと言うことだ。しかし、何に読者が興味を持つかは千差万別であろうから判定は難しい。学生の実態と興味をよく知る必要がある。

Munat はここで、十代の読み物に関する専門家たちが選んだ共通の関心事<sup>7)</sup>をいくつか提示している。上位から記すと、スポーツ・冒険物語・自然や動物の物語・歴史（特に歴史小説）・思春期の問題を扱った小説（異性・仲間作り・両親との関係・麻薬 etc.）・ミステリーとサスペンス・伝記・職業・少数民族の物語・科学小説・ユーモア等となる。前述の J A C E T の調査<sup>8)</sup>でも、学生の興味は圧倒的に小説に集中している。

次に考慮されている点は、その作品が最後まで読み通させるほどの力を持っているかどうかである。そして最後に、その作品を読むことにより、更にまた次々と本を読んでいこうという意欲を湧かせられるかどうかを考慮されている。

## X お わ り に

Munat のチェックリストをここに紹介した意図は、選書をする場合に、実

際にこの表通りに点数化することを勧めるためではない。大学生の興味を引き、なおかつ易しい読み物を探す時に考慮に入れねばならない点を、このチェックリストはかなり広く網羅していると思えるからだ。経験を重ねた教師ならば、これらの各点は作品を一読するだけで押さえられるかも知れない。また先に述べたように、学生によっては、これらの各点のどれかが満たされている作品であるならば、それで充分ふさわしいこともあるであろう。

一番大事な点は、このチェックリストは英文講読全部のプログラムをカバーする選書の基準ではなく、最初の取っ掛りを掴ませるためのヒントであるということだ。この high low books を通し、読むことに自信をつけた学生たちは、更に sophisticated され、変化に富み、底の深い文章の世界に入り込んで行けるようになるだろう。使える語彙や表現を増し、批判的な読みが出来るレベルへと移っていこう。

To start where they are does not, on the other hand, mean staying there; it only means starting there.

Raymond Reno<sup>8)</sup>

#### 注

- 1) 丸本郁子 “英文講読指導私案” 『大阪女学院短期大学紀要』9号, (1978) 105—120頁。
- 2) Raymond H. Reno, *The Impact Teacher* (St. Paul; 3M Educational Press, 1967), p. 88.
- 3) Fred M. Hechinger, “The Losing War Against Illiteracy”, *The 1977 World Book Year Book* (Chicago: Field Enterprises, 1977), p. 80.
- 4) Florence Howe Munat, “A Checklist for High Low Books for Young Adults”, *School Library Journal* 27:8 (April 1981): 23-27.
- 5) 大学英語教育学会, 教材研究委員会『大学一般教養課程における英語講読用教科書のあり方』(大学英語教育学会, 1981) 81-2頁。
- 6) B. Edward Fry, “A Readability Formula That Saves Time”, *Journal of Reading* 11:7 (April 1968): 514.
- 7) *Books for the Teen-Age* (New York Public Library)  
*Books for You and High Interest-Easy Reading for Junior and Senior High School Students* (National Council of Teachers of English)  
Withrow, Carey & Hirzel's *Gateway to Readable Books* (Wilson)

英文講読用教材を選ぶヒント

8) Reno, *op. cit.*

9) 文中の表はすべて Munat の “A Checklist for High Low Books for Young Adults” よりとった。

(1982年2月受領)